

書 評

地球文明ビジョン 「環境」が語る脱成長社会

古沢広祐 著 NHKBOOKS 定価900円 245頁

杉本 時哉(協同総研理事長)



本書の著者古沢さんは、「協同の発見」誌前号でワーカーズ全国交流集会の報告に登場されている。

本書の構成は、I. 破局は回避できるか。

II. 永続可能な発展を

どう実現するか。III. 社会性をもつ消費者意識へ。

IV. 「豊かさ」の矛盾。V. 地球文明ビジョンの五章から成っている。

第I章では、まず人類が大繁栄をした20世紀とは何だったのか? と問い、人類史の長い時の流れのなかでもきわめて特異な時代、急激な成長を、人口、エネルギー消費、情報、交通等の指数を挙げて跡づけ、それが実に不安定な基礎の上にあり、環境破壊、生命活動維持に不可欠な基礎条件が壊れつつある「破局以外の何物をも意味しない」ことを警告。「物質的豊かさ・・GNP中心の経済成長という呪縛からの解放・・新たな社会経済システムへの糸口をどこに見出したらよいか」という問いを突きつけられている」という著者の問題意識を極めて鮮明に打ち出している。その上で70年のローマクラブの『成長の限界』以来の近未来のいくつかのシナリオを要領よく紹介、検討した後、ブラジルでの「地球サミット」「リオデジャネイロ宣言」と「アジェンダ21」の意義・特徴を政府・NGOを含めて、これも簡潔、明快に解説し、「地球的共同体へと進む21世紀人類の新しい文明を予感させる重要な手がかり」を見ようとしている。

II章では、地球サミット以後の世界の動きを、まず「サステイナブル」という概念の吟味から説き起こし、著者はここで「持続的」というより「永続的」という用語を選ぶ。その上で著者は4つの基本的価値、「経済」「環境」「公正」「多様性」の評

価軸の必要をあげ、そのバランスが課題だとしている。そして人口、食糧、環境、貿易を巡る相互の関連を多角的に分析・検討し、英国の環境科学者の所説「4つの立場」を足がかりに環境と開発・経済の在り方を世界での所説や実践を豊富に紹介しながら検討する。

III章では、資本主義システムが創り出したデリケートで移り気な「欲望の集合体」あるいは「産業の家畜」ともいうべき消費者、「欲望を持続的にあるいは強制的に拡大再生産するさまざまな仕組み」を具体的に例示しながら「消費のあり方とその質を根本的に問いなおさねばならない時代」を迎えているのではないかと問い、エシカルコンシューマー（倫理的ないし社会的責任を意識した消費者）の動きを広く紹介してくれる。

IV章では日本はじめ世界の官庁白書その他の「豊かさ」をめぐる分析や主張を紹介しつつ「脱成長・永続可能な社会をどう構想するか」を論じている。

最後のV章では、NGOのあるグループが作ったポスター「1000人の地球村」を引用して現状認識のグローバル化を導き、「統制(強制)原理」や「市場(競争)原理」に対して「共生・共創の原理」に立つ新しいシステムへの担い手として「共」のセクターを構成する各種の組織とその実践を紹介している。著者は結論として「私たちは、人間の経済・社会活動をばらばらな個々人の物的な欲望や利便性といった狭い精神性に閉じ込めるのでない、新たな人間解放ともいうべき時代の幕開け直前に生きている」のだと呼び掛けているのである。

文章は極めて明快・平易で決して説教するのではなく、常に問いかけ、読者に考えさせ、認識を導き促す語り口であり、資料や実践など豊富な情報を駆使している。ぜひ多くの人々、活動家にも、今一度この本により、考えを整理されるようお勧めする。